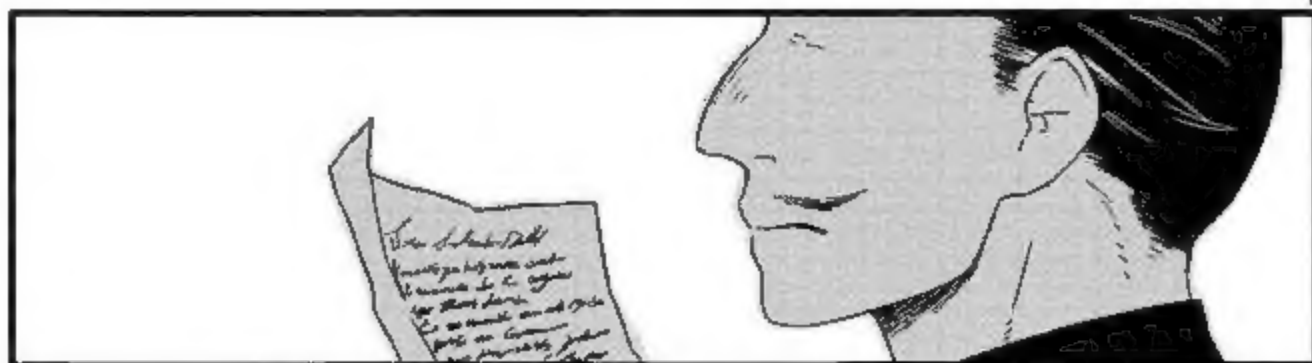
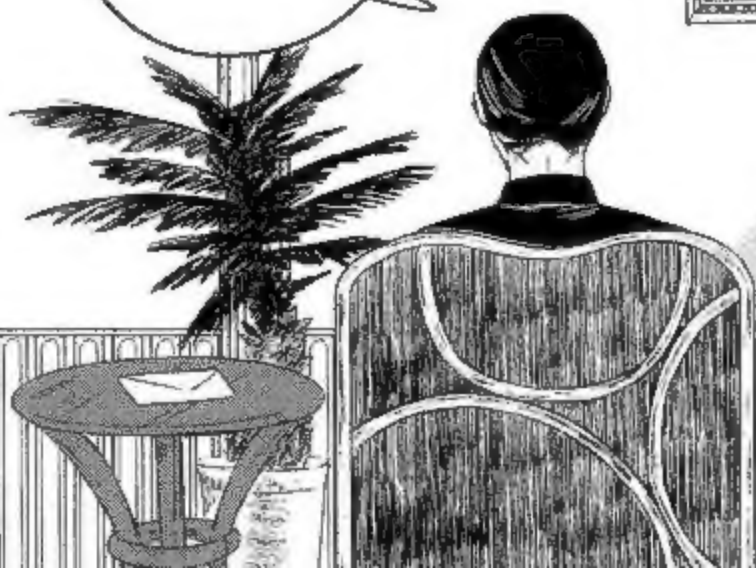
編集部一同、興奮！感嘆！絶賛！第281回 スピリッツ賞 入選作!!

胸を打つ、画家と詩人とひとりの女の青春。

1936年 フランス・パリ――

¡Olé!

どうしたの、兄さん。

フェデリカが死んだんだ。

読切40P

あたしのフェデリカ

あたしのフェデリカ
Querida Mi Federica
藤見よいこ
スペインの空の下——
まだ若くて何もなくて
無名だった三人の
それがずっと続くと思ってた。
第281回スピリッツ賞入選作

……!

…いや、殺されたのか…

ああ アナマリア、露台(バルコニー)を開けてくれ。

……この部屋には露台なんてないじゃない。

外が見たいんだ。

じゃあ、その窓でいい…

けっして知りたくはなかった知らせが、ふたりの追憶の扉を開ける——

その日、スペインが生んだ最高の詩人、フェデリコ・ロルカは死んだ。

彼の愛した祖国・スペインに殺されたのだ。

あたしはモデルだったわ。

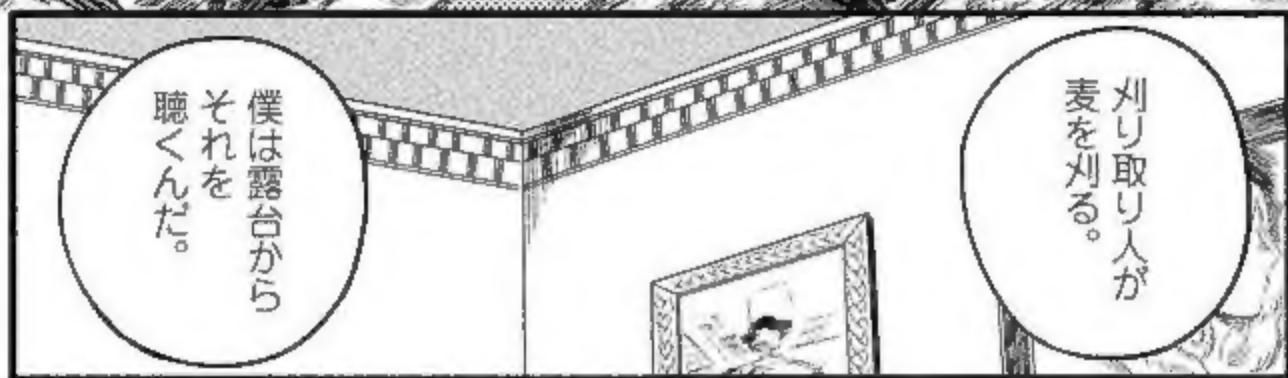
兄さんはあたしを描いていて…

フェデリカは詩を読んでいた。

私と兄のサルヴァドール・ダリ、そしてフェデリカは
同じ時代、同じ場所で青春を過ごした友人だった――

「僕が死んだら露台を開けたままにしておいて。

子どもがオレンジを食べる。

僕は露台からそれを聴くんだ。

刈り取り人が麦を刈る。

僕は露台からそれを聴くんだ。

僕が死んだら……

露台は開けたままにしておいて」――…

ああ！ フェデリカ！

なんて悲しい詩なの、胸が張り裂けちゃいそうよ！

おい！

おい、動くな。アナマリア!!

※出典／ロルカ作「露台 El balcón」より

それは無理よ！
だってフェデリカの朗読はまるで劇場にいるみたいに真に迫ってるもの！
僕を誰だと思ってるんだ？
お前の兄である前に天才画家サルヴァドール・ダリだ。
ああ、そうか！
でもお前はこいつの観客じゃないんだ。集中してくれないか！
それなら僕こそスペイン稀代の天才詩人フェデリコ・ロルカさ。

セルバンテスの詩だって僕の制作の邪魔はできないね。
ドスッ
せっかく別荘まで来たのに…
ペタ
ペタ
ペタ
個展でけちょんけちょんに言われたらどうしてくれる！
ねえ兄さん、少し休憩にしない？
兄さんは少し根を詰めすぎなんじゃないかしら？
ぎゅ！
兄さんは確かに天才よ！
だからもっと余裕を持っていいと思うの。
そうだよ、サルヴァ。
君は絵を描く時、少し感情的になりすぎる。
…僕が情緒不安定だって言いたいのかい？
フェデリカ！

そうじゃないよ。
そう聞こえたんだよ！
君は年上だからって必要以上に僕を庇護しようとして――
そのじつ、見下すきらいがあるんじゃないか！

僕は君の才能を本心から認めている。
ただ君はまだ若いし、どうも危なっかしいからね。

だからっていつも介添えみたいな真似してるのか？

ね…ねえ、二人とも！
介添えだなんて…
ただ 君はその才能を外に出していくのがどうも不得手だから…
だからそれを見下すって言うんじゃないのか！

ほんとに…人と付き合うのが苦手な人なの。

陰気で卑屈な割りに自信過剰で…
たぶん女の人にも声をかけられないから、
それであたしばっかり描いてるんだけど…
…言いたい放題だね、アナマリア。
家に父さんと一緒にいた時はずっと怯えてて…
毎日、とても辛そうだった…
でもね、兄さん あれでもすっごく明るくなったのよ。
あなたと「学生館」で出会ってから！
フェデリカのことは本当に好きみたいなの。
あれも甘えてるみたいなもので…
大丈夫だよ、アナマリア。

彼のことはよく分かってるつもりだよ。
サルヴァが「学生館」に来たばかりの頃の話はしたっけ？
ハハハ。まったくくだらないな。
――僕だって、
僕だってとても面白い画家なんだよ。

？

どうした？サルヴァドール。

なんの話だ——？

ぶるぶるぶる

ガターン

うわ〜〜〜ん、だから言っただろー！

僕が発言しようとするとこうなるんだよ!!

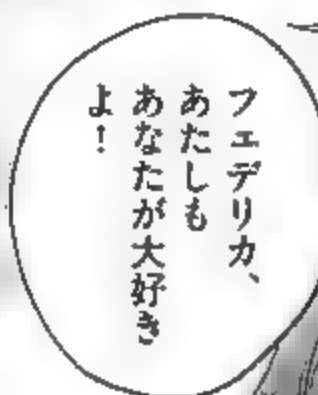
もう二度とお前らの前で喋らないからな。

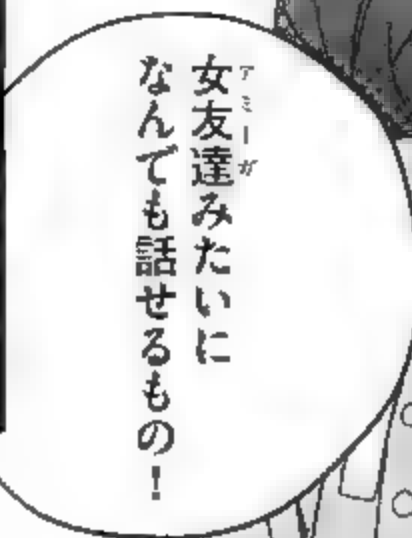
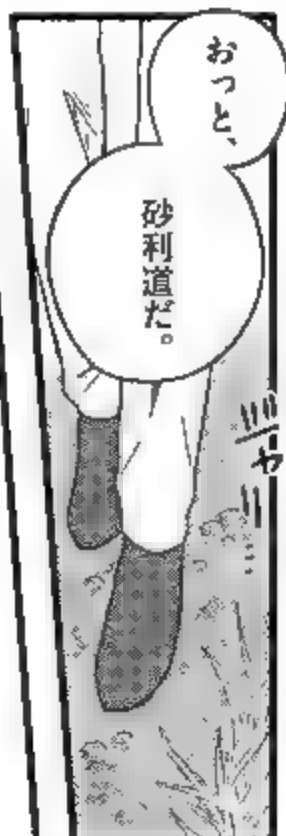
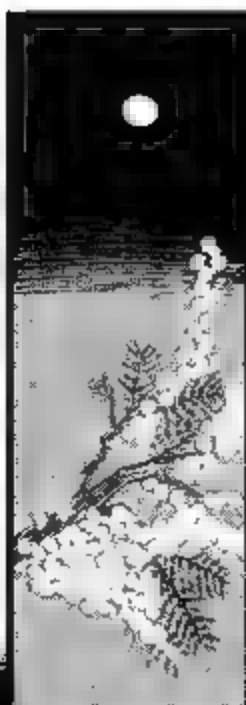
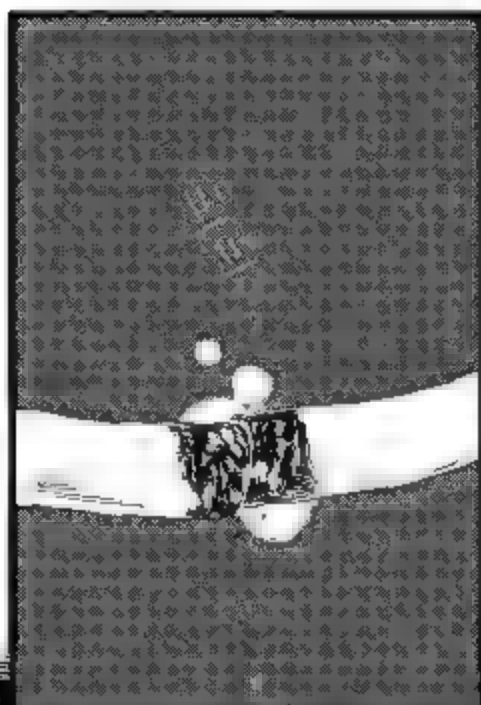
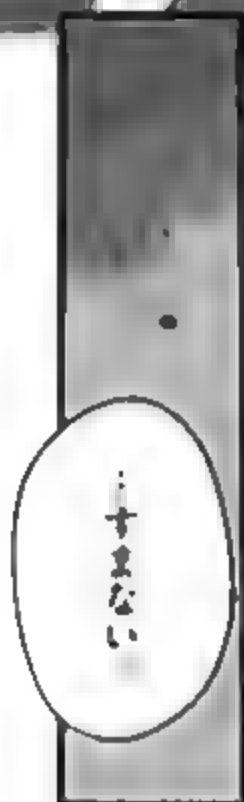
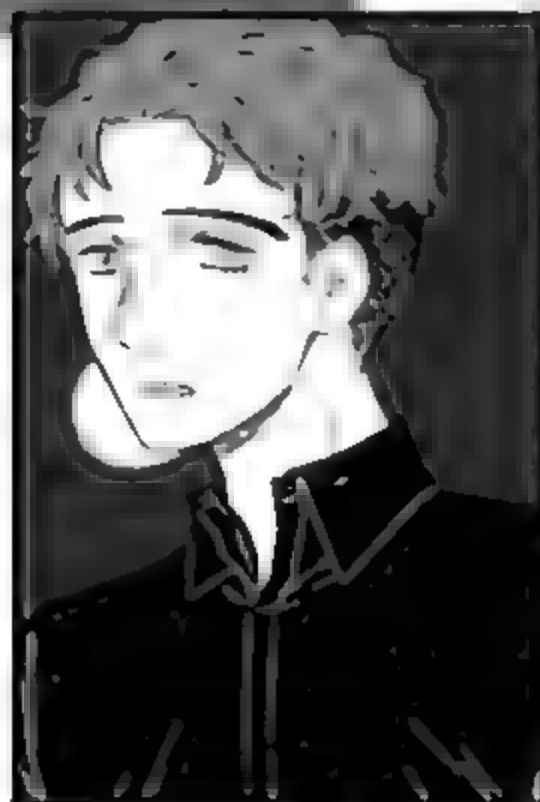
まったく天才画家の言うことはよく分かんねぇよ

どうかしてやがんぜ。

話に…入りたかったんだね……

に…兄さんったら…

あ…お節介だったかしら。
それにあたし、お喋りで…
そんなことない。
君のそういう素直で可愛いところ、僕は大好きだよ。
あ…
ありがとう。
フェデリカ、あたしもあなたが大好きよ！
女友達(アミーガ)みたいになんでも話せるもの！
アミーガね…それで女の子の名前(フェデリカ)で呼んでるの？
ふふふ。呼び出したのは兄さんだけど、きっとそういう意味合いね！

おっと、
砂利道だ。
腕を組んでもいいかな。

ごめんね、アナマリア。
生まれつきなんだ。少し足が悪くて…
ううん、大丈夫よ！大丈夫。
掴まって…
何マイルだってあなたとなら歩くわ！
…そうやってすぐ大きいこと言うとこもお兄さん似だね。

おい、
フェデリカ。
妹に余計なこと言うなよ。
大体…僕は話し下手なわけじゃない。
周りの連中が話を聞いてくれないだけで…
聞いてたの…
まったく君は寂しがり屋だね。
サルヴァ。
火、
貸してくれないか。

…ああ。
アナマリアは本当にいい子だね。
当たり前だ、僕の妹だぞ。
ははは、そうだね。君によく似てる。

それにとても可愛い。
魅力的だ。
フ・エ・デ・リ・カ・にあいつの魅力が分かるのか!?
…すまない。

「学生館」の連中は
僕から奪ってゆく
ばかりだ。
でも
君は違う。
初めてだよ…
人に与えて
もらったと感じ、
同時に…
誰かの才能に
激しい嫉妬さえ
覚えたのは……

フェデリコ・・・。
僕は君を
尊敬しているん
だよ。

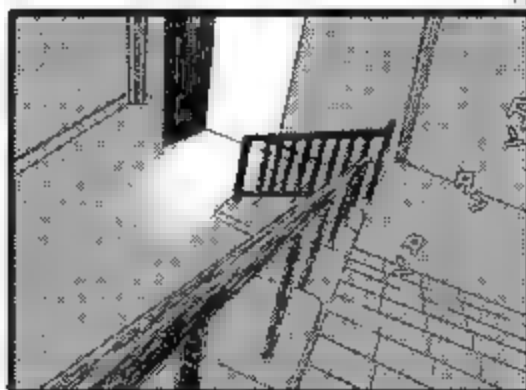
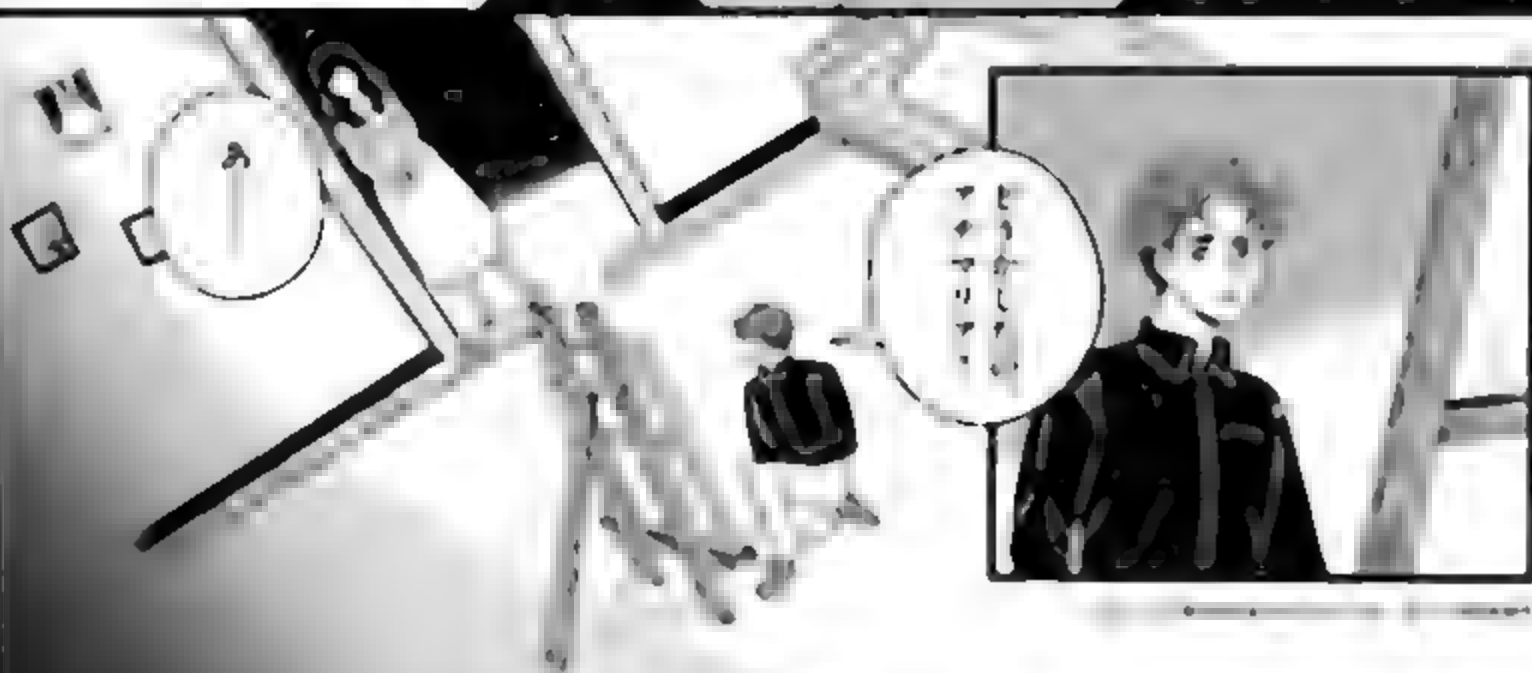
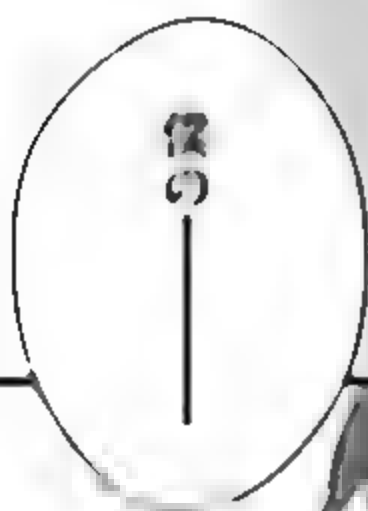
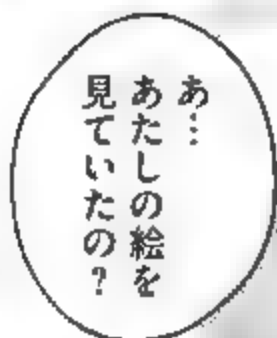
……よく
知っているよ。

＊出典　ロルカ作 歌の本『Arbol de canción』より

アナマリア・ダリに捧ぐ――フェデリコ・ガルシア・ロルカ。
はあ…やっぱりフェデリコの詩は素敵だわ…
ううん…
素敵なのは…
ごろん
………
フェデリカはあたしが好きなのかしら…
だっつつ、
だめよ!!
こんなのうぬぼれだわ。みっともない!
バカバカ!アナマリアのおバカさん!!
…でも、
もしも…
もしもよ…
あたしが彼の女友達じゃなくて…恋人になるんだとしたら……

ずっと三人で
いられるんじゃ
ないかしら——
……
眠れなく
なっちゃった…
み、
水でも
飲みに行こう
かな!

フェデリカ…？

僕の——
え——

あの…
ごめんなさい。うるさかったかしら？
？
何が？ちっともうるさくなんかないよ。
どうかしたの？
あ…水を……
ドキ
ドキ
違うの…
心臓の音が…
あ…あたしの絵を見ていたの？

そうだよ。
素晴らしい絵だ。
うん！
兄さんはやっぱり天才だわ。
ああ！
神の吹き込む霊感を人に与えるのが天才というのなら、
彼はやはり天才だ…
美しい。
そ…そうかしら…
あたしはちょっとお尻が大きいかなって思うんだけど…
美しい…本当に素晴らしい…

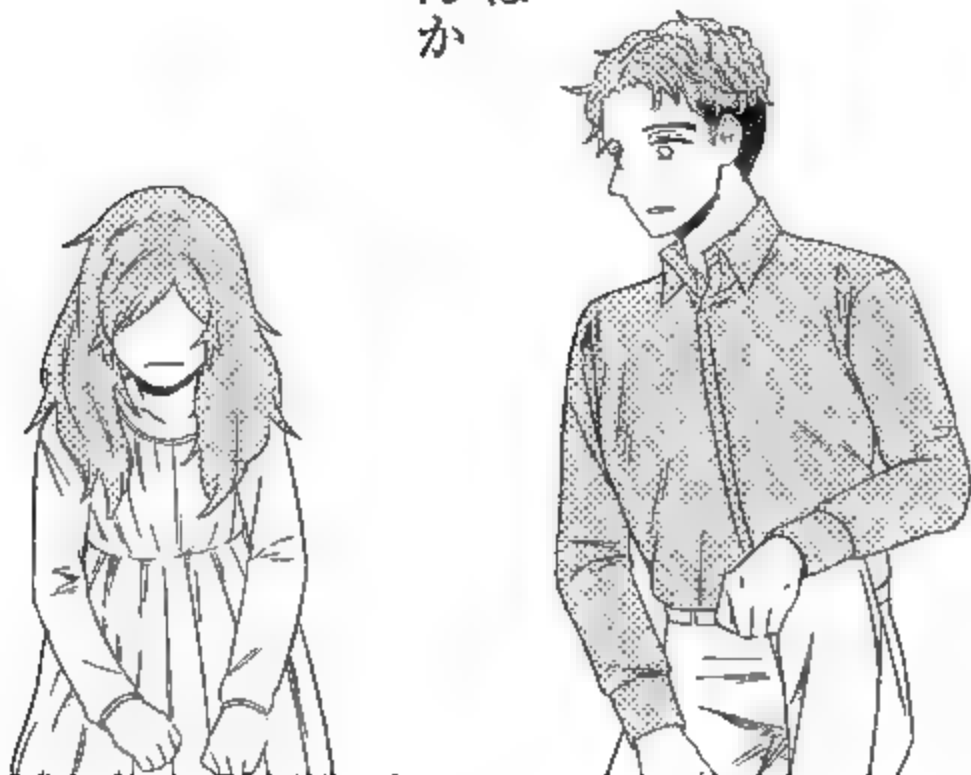
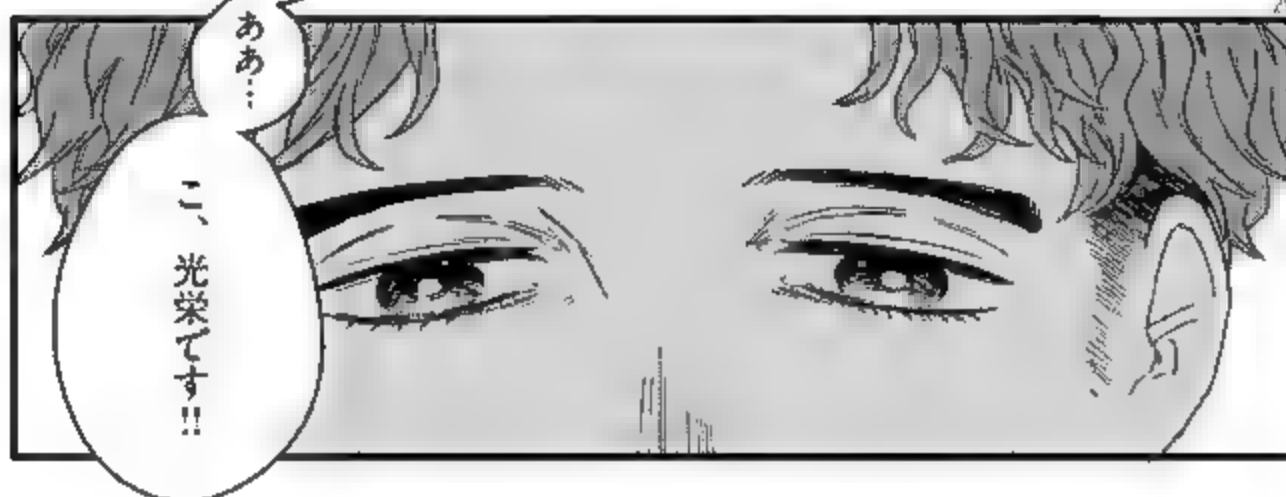
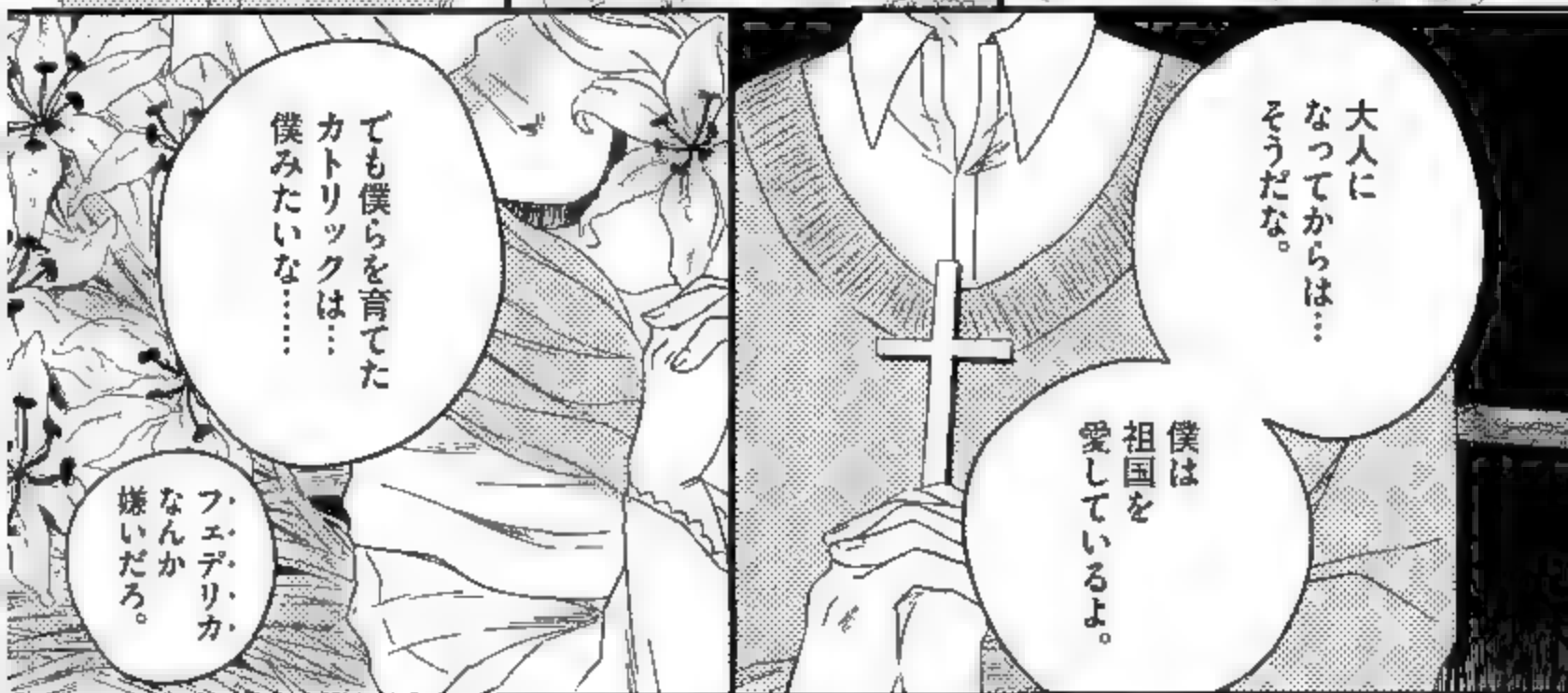
※死んで十字架から降ろされたキリストを抱く聖母マリアの図や彫刻のこと。

僕はきっと
死んでしまう。
ずっと見てるよ。
あなたのこと。

でもフェデリカは
あたしのことなんか
見てない。

彼が
見ているのは
……

サルヴァドール・ダリ！
君か…!!
いくつだ？ずいぶん若いな。
EXPOSICION DE DALI
あ…21です。
21！大した才能だ。
今後が楽しみだよ。
君の名はスペインの…いや この世界の歴史に残るね。
いずれ誰もが、
君を知ることになるよ！
あ、ああ…
こ、光栄です!!

アナマリア、
僕はね……
きっと一生振り向かないから恋してるんだ。

小さい頃は思ってた。
なんで僕の足は自由に動かないんだろうって。
こんなに、
こんなに駆け回りたいのにって。
大人になってからは…そうだな。
僕は祖国を愛しているよ。
でも僕らを育てたカトリックは…僕みたいな……
フェデリカなんか嫌いだろ。
でも分かっていながらそういうものを求めてしまうのが、
詩人の…
退嬰的なロマンチストの宿命だ。

まあ でも この人生も そんなに悪くは ないんだよ。
――あなた、不幸になるわ！
ぎゅ…
もっと…
たやすい人生だってあるはずじゃない？

だめなんだよ、アナマリア！

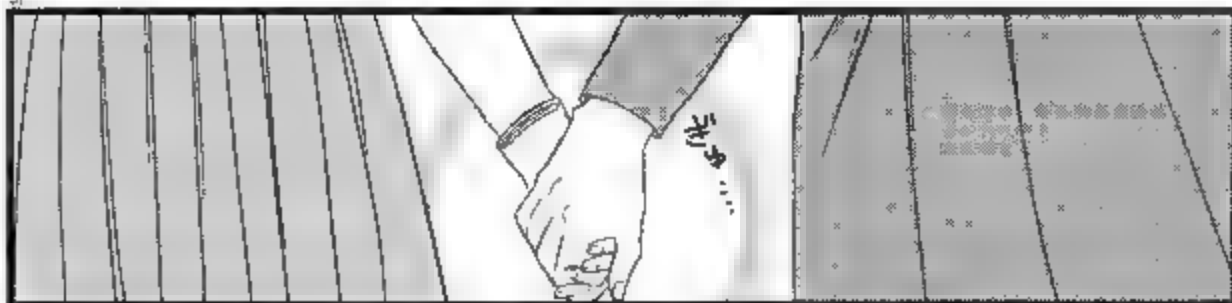
それが詩人の宿命なんだよ。

僕は君たちのことが本当に好きだよ。

だからそろそろ ここを出て行かないといけない。

ここは…

僕らの祖国は…

そう遠くないうちに灰色の時代が来るよ。

それを乗り越えたら新しい時代が来る。
とても自由な時代だ。
そして新しい道もできる――
そこを少しでも歩きやすくするのが、僕の仕事だ。
だからね…
もうお別れなんだ。

さよなら。

僕のアナマリア。

――…

おーい！

来てくれてたんだね、二人とも。

こっちを振り向いていない意味ありげな構図が素晴らしいと…
ぎゃー!! そうだ!! あのパブロ・ピカソも称賛してくれたんだぜ!!
とりあえず落ち着けよ、サルヴァ。
あっあっあとで二人で食事でもしないか!?
パーティーだ。
記念すべき日だ、今日は!
いいね! バルセロナの食事は久しぶりだ。

どうだい、フェデリカ!
もう君の介添えなんか必要としないぞ。

分かった分かった、天才画家どの。
もう…兄さんったら…

確かにこの時、
私たちの青春は終わったのだ——

フェデリカのやつめ…
逃げれば良かったんだ。
僕ならそうするけどね。
僕たちのような天才がたかだかスペイン国内のバカバカしい小競り合いに巻き込まれるなんて…
ぽた
ぽた
ぽた
世界の…
損失、だ。

何が歩きやすくするだ！
横断歩道だってふらふら渡ってたくせに。
ああ畜生！まったくどうしてこんなことになってしまったんだ…
フェデリカが死ぬなんて。

ふらふらでもずっと戦ってきたのよ。
それがあの人の宿命だった。
そう、兄さんは知らない…
あたしの、
愛する人に祖国にさえ背を向けられても手に入れたいと願わずにいられなかった——
あたしだけの…

あたしだけのフェデリカ…
さよなら――
[あたしのフェデリカ]ー完ー
藤見氏は次回作、構想中！再登場をご期待ください!!